

学級集団アセスメントを基盤にしたグループ体験活動の試み

－Q-U と連想法、疎外感アンケートの活用と対応－

松尾 博愛（教育学研究科／南島原市立南有馬中学校）
中田富士男（教育学部人間発達講座）
上菌恒太郎（教育学部人間発達講座）
木下 信義（教育学部初等教育講座）
内野 成美（教育学部人間発達講座）

はじめに

本研究は、教師が学問に媒介された知によって、自分の経験知を確かめながら安心して学級運営を行うために学級集団をアセスメントし、得られた結果を基に日々の教育活動に結びつけることが重要であるという視点に立ち行ったものである。教師が経験知と学問に媒介された知をもとにした学級運営を行うことで、生徒が安心して学校生活を送ることができるのである。

学級運営の課題であるいじめ、不登校、引きこもり、非行等の学校不適応行動には様々な要因が指摘されているが、本研究では中でも、人間関係を構築する力の低下を学校不適応行動の一つの要因として取り上げる。人間関係を構築する力を取り扱ったのは、将来にわたり社会生活を営むには人と関わって生きていく必要があり、人と人をつなぐことは大切であると考えたからである。

第1章 研究の目的と方法

第1節 研究の目的

本研究の目的は、普段教師が行っている観察法によるアセスメントに加え、他の質問紙法を組み合わせることにより客観的な見方から生徒を捉え、浮かび上がったよさや課題をもとに指導・支援計画を策定し、グループ体験活動を行い、コミュニケーションスキルの向上、関係性の構築を図り、よりよい人間関係をはぐくむことである。ここで述べるよりよい人間関係をはぐくむとは、学級集団での活動を通して心理的、行動的アプローチを行い、心理的援助、人間的成長の促進、ソーシャルスキルの向上を目指しており、本実践では人間関係の構築とコミュニケーションスキルの向上をねらった。

実践にあたっては、集団の今ある状態をさらに高めることで、個人をも支援できると考え、個々人の場合の個別支援ではなく、集団とのかかわりの中でグループ体験活

動を通じた指導・支援を取り入れた。ここで述べるグループ体験活動とは、構成的グループ・エンカウンター（以後 SGE）とアサーション・トレーニングのこととする。

先行研究によると「ショートエクササイズによる継続的な SGE が生徒の学級生活満足感を高める」（小野寺、河村 2005）ことが既に示唆されている。先行研究においてはショートエクササイズにおける SGE の内容を固定し、継続した実践で効果が示されている。

本研究では、アセスメント結果を受け、学級集団の課題や友人関係において課題を抱える生徒に配慮し、あえて内容や形態を固定しない継続したショートエクササイズによる SGE とアサーション・トレーニングを組み合わせたグループ体験活動を実践した。

第 2 節 研究の仮説

実践にあたっての研究仮説を以下に示す。

1. Q-Uと連想法、疎外感アンケートの分析、生徒の行動観察を組み合わせた学級集団アセスメントを行うことにより、学級集団と個人におけるよさや課題がより明確に見えてくるであろう。
2. 学級集団アセスメントによって捉えたよさや課題を基に、生徒理解が深まりより効果的な指導・支援計画が立案できるであろう。
3. 指導・支援の中にグループ体験活動を仕組むことで、自尊感情や社会性が芽生え学級に所属する生徒たちの関係が構築され、コミュニケーションが活発となるであろう。
4. グループ体験活動の中で、活動内容や活動形態を工夫した計画を意図的に仕組むことで、学級全体での指導・支援が、友人関係において特に教育的配慮を必要とする生徒に対しても有効な手立てと成り得るであろう。
5. 短学活の場（一般的に朝の会、帰りの会と言われる）を有効に活用することで生徒同士の人間関係をはぐくむことが可能であろう。

第 3 節 研究の内容と方法

研究の対象学級について

調査学級は、長崎県内 A 中学校 男子 18 名、女子 14 名、合計 32 名 1 年生 1 クラスである。学級担任との連携のもと学級集団アセスメントを行った結果、友人関係において特に教育的配慮を必要とする生徒 4 名（A さん、B 君、C 君、D さん）を抽出した。学級集団アセスメント作業では、まず、フィールドワークと調査学級の学級担任との十分な情報交換をもとに個人や学級のよさや課題を見つけることから始めた。次に、そこから出た課題を考察し、質問紙法を選定して調査を行った。アセスメントで用いた質問紙法は、①Q-U、②中学生用疎外感尺度（宮下・小林、1981）、③

中学生学校社会的スキル尺度(橋口、1996)、④道徳性アンケートであり、実際の指導・支援にかかる前の5月(一部6月に実施)と9月に実施した。

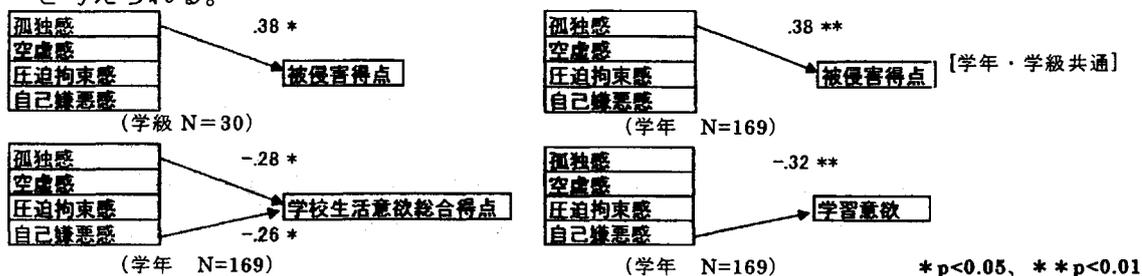
グループ体験活動後の効果を検証するために用いた方法は、①エクササイズ振り返り用紙(5件法、感想)、②行動観察(フィールドノーツ)、③授業におけるチェックリスト(学習に対する適応行動調査)、④連想法による授業分析(アサーション・トレーニング)、⑤Q-U、⑥中学生用疎外感尺度(宮下・小林、1981)、⑦中学生学校社会的スキル尺度(橋口、1996)である。

第2章 学級集団のアセスメント

Q-U、中学生用疎外感尺度、連想法、フィールドノーツを活用して学級集団のアセスメントを行った。ここでは紙面の都合上、その一部を紹介する。

1. Q-Uと疎外感との重回帰分析の結果、以下の点がわかった。

被侵害得点は、孤独感が高くなるほど高いことが見出された。これは、学年の重回帰分析での結果とも共通している。次に、学校生活意欲総合得点は、孤独感が低いほど、また自己嫌悪感が低いほど、高くなるが見出された。つまり、孤独感や自己嫌悪感が低い生徒ほど、学校生活意欲総合得点「友人との関係、学習意欲、教師との関係、学級との関係、進路意識」が高い傾向にあると考えられる。さらに、学年の傾向として、学習意欲は、自己嫌悪感が低いほど高くなるが見出された。つまり、自尊感情が高い生徒ほど、学習意欲が高い傾向にあると考えられる。



2. 作成した連想マップは、Q-Uにおいて既に記述された「楽しいと思うこと」、「いごちのよい場所」のデータを基に回答語として抽出し、完成させたものである。

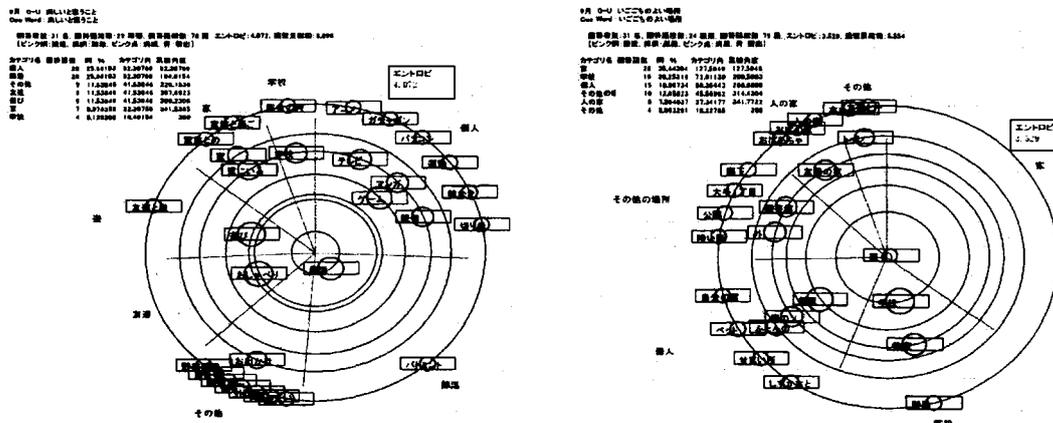


図2-1 9月「楽しいと思うこと」に関する回答語の連想マップ 図2-2 9月「いごちのよい場所」に関する回答語の連想マップ

5月と9月を比較すると、「楽しいと思うこと」の質問からは、カテゴリ<<遊び>>、<<友達>>が減少し、カテゴリ<<部活>>、<<個人>>の回答語数が増加している。このことから中学校の部活動の存在が色濃く出ていること、友達との遊びから一人遊びに変化していることがわかった。また、「いごちのよい場所」の質問からは、カテゴリ<<家>>、<<その他の場所>>が減少し、カテゴリ<<個人>>が増加している。カテゴリ<<その他の場所>>の内訳は、「公園」、「図書館」、「外」といった回答語であり、カテゴリ<<個人>>の回答語は、「部屋」、「ベッド」、「静かな所」などである。回答語数の増減や回答結果から、家庭の中でもより一人になることができる部屋の方が居心地がよいと感じており、また、人が大勢いるような所より一人の方が居心地がよいと感じていることがわかった。

以上のことから判断すると、一人の方が楽しく居心地がよいと感じる傾向が強く、人と関わらなくてよい一人遊び、内遊びへと変化していることが明らかとなった。

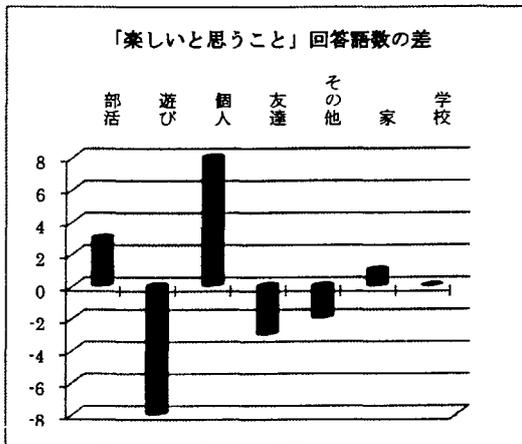


図 2-3 「楽しいと思うこと」各カテゴリの回答語数の差

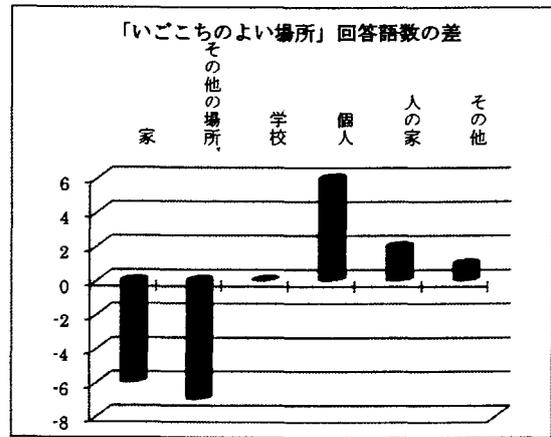


図 2-4 「いごちのよい場所」各カテゴリの回答語数の差

第3章 アセスメントを基にした分析と対応

第1節 アセスメントに基づく学級集団の分析

第1項 アセスメントに基づく学級の分析

事前調査や学級担任との情報交換を通して、学級集団の分析を行った結果、以下に示す学級の傾向がわかった。

1. 学級全体のソーシャルスキルの傾向として、主張性スキルが最も低く、配慮のスキルが最も高い。授業や学級での話し合う場面では学級のリーダーに任せきりで自分の意見を発表することが少なかった。友達との関係性が構築できないため、自分の意見を人前で表現することが苦手であること、自分

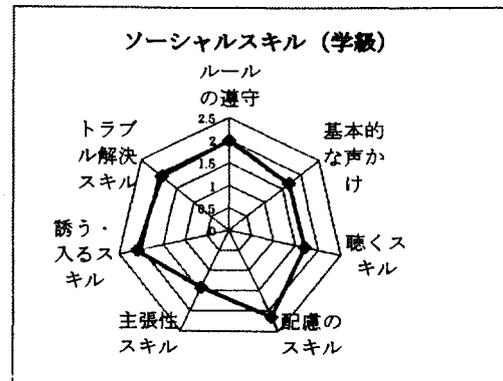


図 3-1 ソーシャルスキルにおける各スキルの比較

の意見を主張し、自己開示することに恥ずかしさを感じているなどフィールドノーツの結果からも明らかとなった。

2. 道徳性アンケートの結果、「主として自分自身に関すること」や「主として他の人とのかかわりに関すること」の内容項目が、「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」、「主として集団や社会とのかかわりに関すること」の内容項目よりも低い結果となった。自分に自信が持てないでいることや友達との人間関係がうまく結べないでいることが考えられる。

3. フィールドノーツから、学級内で孤立しているかグループを組んでいるかの二極化が起きていること、また、友達同士の関係がつくれず会話が少ないことが示唆された。さらに、学級内にルールが確立されており、学校内の生活面で規律を守ろうとする生徒が多いが、教師が主導しないと自分からは動けないでいることがわかった。

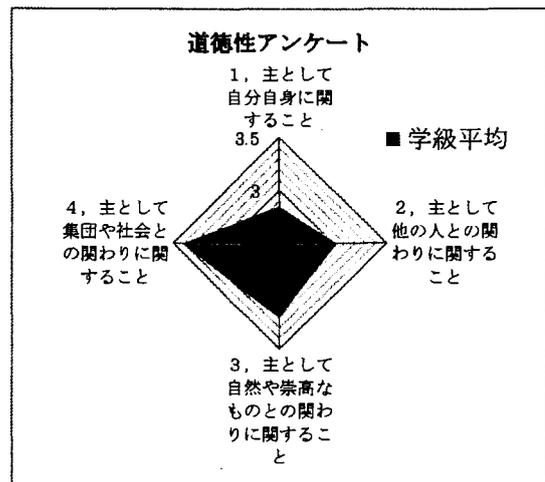


図 3-2 道徳学習指導要領の 4 つの領域との比較

第2項 アセスメントに基づく抽出児の分析

アセスメントの結果、学級の中で抽出児 4 名は孤立している、不安や悩みを抱えている、友達に対して粗野な言動をとるなどのいずれかの課題を強く抱えている生徒であることが明らかとなった。この 4 名の特徴を以下に示すが、ここでは紙面の都合上、その一部を紹介する。

1. Q-U の結果、4 名のうち 3 名 (A さん、C 君、D さん) が学級生活不満足群に属していることがわかった。(B 君は非承認群)

表 3-1 抽出児の所属群の変化

個人	Aさん	B君	C君	Dさん
5月	侵害行為認知群	学級生活満足群	学級生活不満足群	学級生活不満足群
9月	学級生活不満足群	非承認群	学級生活不満足群	学級生活不満足群

2. 中学生疎外感尺度を用いた調査から、学級の他の生徒より疎外感合計得点が高いことがわかった。特に 4 名のうち D さん、C 君に関してその傾向が強く表れている。

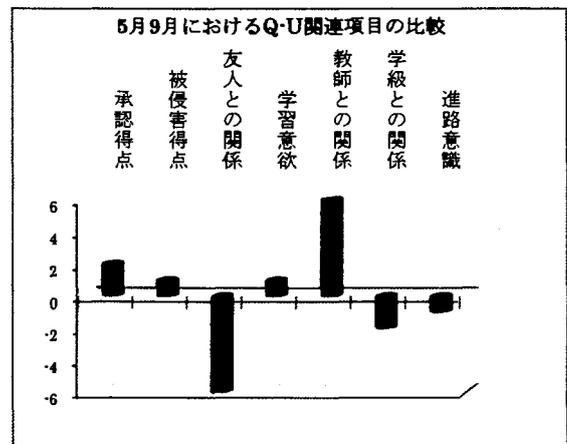


図 3-3 C君 Q-U における内容項目の差

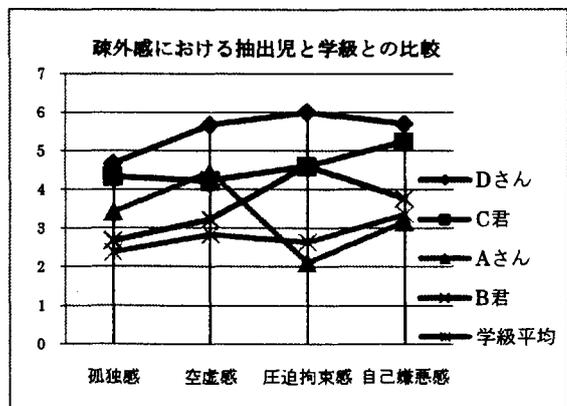


図 3-4 疎外感における抽出児と学級の比較

- 中学生学校社会的スキル尺度を用いた調査からは、主張性スキルが低いことが明らかとなった。これは学級の傾向とも共通しており、Dさんを除くAさん、B君、C君の3名は特に低い傾向にある。
- フィールドノーツからは、多面的に抽出児の特徴を捉えることができた。特にB君に関しては、学習面で不適応を起こしていたため、フィールドノーツとあわせ、学習に対する適応行動調査により実態把握を行った。

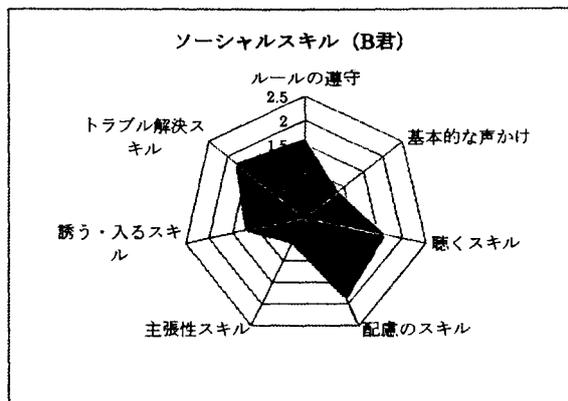


図 3-5 B君 ソーシャルスキル

第2節 アセスメントを基にした指導・支援計画

指導・支援計画を立てるにあたり、学級の課題と友人との人間関係で教育的配慮を必要とする生徒の課題が重なる部分があること、集団での関わりの中で個を伸ばすというアプローチから、学級全体での指導・支援を行うこととした。グループ体験活動では、関係性の構築とコミュニケーションを活発にすることをねらい、以下の点に配慮した計画を立てた。

- 体を動かすようなゲーム性の強いエクササイズをはじめに仕組み、全体のモチベーションを高めた後、自己開示や自己発見を取り入れる活動を仕組んだ。
- 友人関係で教育的配慮を必要とする生徒に対しては、活動の内容の工夫、友達との組み合わせへの配慮、机間指導を通じた声かけや励ましによる支援を計画した。
- 2人組から小集団(3~4人)、中集団(5~6人)での活動へ移行する活動人数の工夫やメンバーの入れ替えなどの構成員に配慮を図ることで、段階的にリレーションを形成し、普段はあまり話さない級友ともコミュニケーションを行うことができるようにした。

表 3-2 実践実習における指導・支援計画

実践実習では、合計 10 回の指導・支援計画を仕組み、短学活における 9 回のエクササイズ、そのうち 8 回目に 50 分のアサーション・トレーニングの授業を行った。実施した指導・支援計画を表 3-2 に示す。

回数	エクササイズの内容	形態
1回	質問じゃんけん	2人組(隣同士)
2回	ジェスチャー伝言ゲーム	列
3回	背中文字送り	列
4回	さいころトーク	3~4人
5回	Xさんからの手紙	全体
6回	いいとこさがし	4~5人
7回	私の短所	5~6人
8回	自他尊重の自己表現	2人組(隣同士)
9回	二者択一	5~6人
10回	すごろくトーク	6~7人

第4章 アセスメントに基づいた実践からの考察

学級集団に関しては、グループ体験活動の回を追うごとに振り返りアンケートの各項目において全体的に数値が上昇していた。また、実践初日と最終日のグループ体験活動の平均点を比べると各項目とも伸びている。10回のグループ体験活動は、学級の生徒に肯定的な効果をもたらしたといえる。

さらに、肯定的な感想の増加から判断すると自分の内面を見つめながら、自己省察を促す効果や相手を理解しようとする気持ちが高まったと考えられる。

2日目の「ジェスチャー伝言ゲーム」において、高い数値を示しているが、これはグループ体験活動の中で体を動かすというゲーム性のある内容であったため、学級全体のモチベーションが上がったことが予想される。10日目の「すごろくトーク」においては、活動自体の楽しさもあるが、活動を通して級友との距離が近くなり、関係性が芽生え始め、他者理解や自分を表現する方法について学び始めたといえる。

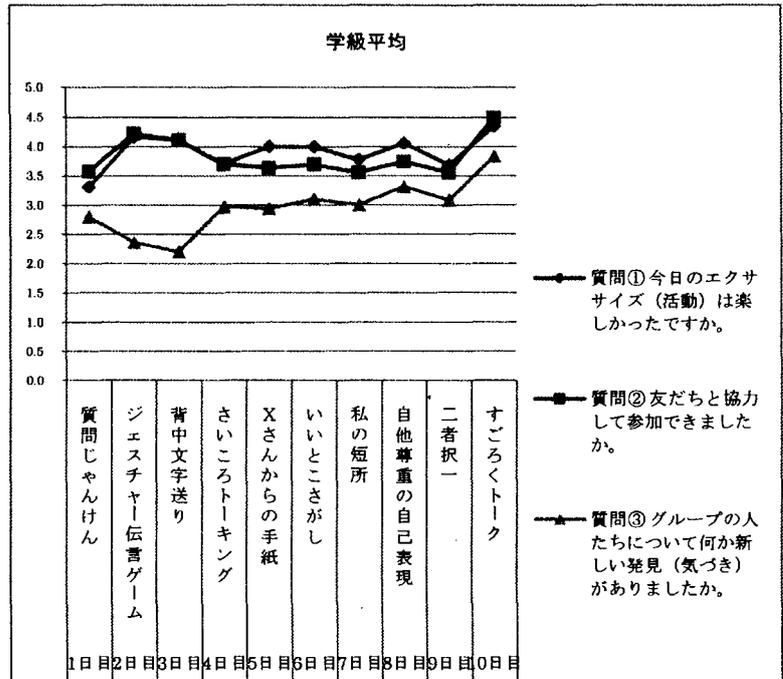


図 4-1 学級全体の振り返り

抽出児に関しては、表情に明るさが増し、友達との関係を築こうとする前向きな気持ちを持ち始めた生徒もいる。抽出生徒も含め学級全体として、生徒同士の会話の増加、友達への配慮、授業に積極的に関わる場面が増えたことから判断すると、学級内でお互いを認め合う気持ちが芽生え、生徒同士の関係性の構築と活発なコミュニケーションが促進できたといえる。

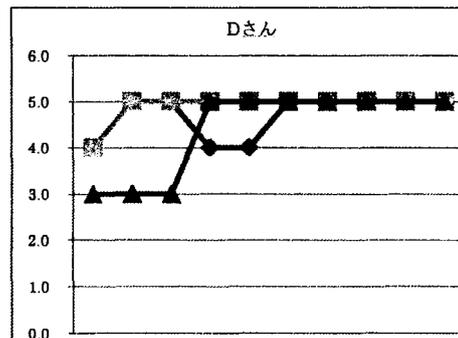


図 4-2 Dさんの振り返り

さらに、グループ体験活動直後の生徒の変容を Q-U、中学生用疎外感尺度(宮下・小林, 1981)、中学生学校社会的スキル尺度(橋口, 1996)を通して検証する予定であったが、調査学級における学級担任が逝去するという予期せぬできごとが発生し、調査するには至らなかった。

終章

第1節 実践研究を終えて

今回、実践実習Ⅰ・Ⅱにおける学級の実態を基に学級集団アセスメントを実施し、アセスメント結果に基づく指導・支援計画を立て実践を試みた。その結果、以下に示すようなことがわかった。

1. 実践後のエクササイズの学級平均点の伸びや感想、また、連想法での授業分析から、生徒同士の間関係をはぐくむ効果が高まったといえる。アセスメントによって浮き上がった学級のよさや課題を基に、意図的・計画的な活動内容を仕組むことで、短学活という短い時間設定であっても生徒の間関係を構築することが可能である。
2. 間関係をはぐくむためのグループ体験活動は、友人関係において教育的配慮を必要とする生徒にとっても学級全体への指導・支援の中で有効に働くことがわかった。活動を重ねることで、生徒の自尊感情や社会性の高揚に僅かではあるが影響したといえる。これは、感想やアンケート結果、フィールドノーツから自己を肯定的に捉えようとする気持ちの高まりや相手を思いやる会話の増加が見られたこと、さらに、連想法での授業後の回答語の変化やカテゴリマップでの自己肯定を表す回答語の増加からもいえる。
3. 普段教師が行っている観察法によるアセスメントに加え、学問に媒介された知によるアセスメントを実施することで、一人ひとりの生徒の多面性が見え、生徒の姿をより客観的に捉えることができた。また、学級集団の状態を把握することによって実態に即した指導・支援ができるため、生徒の実態を捉えた学習指導や他の教育活動の指導・支援に対しても有効に働く。
4. フィールドノーツでは、顕在的な側面から学級や生徒個々のプラス・マイナス面を捉えることができた。また、連想法や質問紙法を組み合わせたアセスメントでは、潜在的な側面から学級や生徒個々の状態を客観的に捉えることができた。教師の経験知と学問に媒介された知の整合性を図ることで、より正確な学級集団の実態を掴むことが可能となった。
5. 連想法を用いた分析から、学級の実態のみでなく生徒のおかれている社会的・環境的課題を探ることが可能であった。連想法は授業効果の検証のみならず、提示語を工夫することで学級集団の臨床診断や生徒の抱えている課題を鮮明にし、学問に媒介された知による生徒理解の充実へとつながる。
6. 学級集団アセスメントを実施することは、現時点での学級や生徒一人ひとりの状態を見極め、そこから指導・支援ができるといった学級臨床診断ができ、教師自身の学級運営を客観的に振り返ることができる。つまり、教師の自立した学級運営へと発展するといえる。

第2節 今後の課題

本研究を通して、その他残された課題として具体的には以下のようなものが考えられた。

1. 複数の質問紙や観察法を組み合わせたアセスメントであっても、判断を行う場合は、教師の教育観や主観的判断が評価に混入してしまうおそれがある。また、複数の質問紙を生徒に課すのは、負担が大きいことから、限られた情報から判断するとなると、教師自身のより高度な専門性や教師間の協働性が求められる。また、アセスメント結果を受けて教師間でコンサルテーションを行う際は、校内の組織体制の課題や専門家によるアドバイスが受けられる状況にあるか否かといった課題も生じてくる。
2. 生徒の人間関係を阻害する社会、物質、環境的要因は様々考えられる。また、個人が抱えている課題やパーソナリティによっても異なる。人間関係を築くためのアプローチは個人や学級の実態に応じて、様々な角度から試みる必要がある。本研究では、主に短学活を活動の場として設定したが、人間関係の構築を進めていくためには、学校行事との関連や人権教育、キャリア教育の観点から、学年・学校全体で取り組む必要がある。同時に、学級活動だけでなく日々の教科指導において学習方法を工夫することで、人間関係を構築する必要があるが、本研究ではそのことについては言及していない。
3. 特に友人関係において教育的配慮を必要とする生徒を抽出したが、学級には他にも様々な課題を抱えている生徒が所属しており、絶えず生徒の日常の観察や気づきから学間に媒介された知によるアセスメントを行うことが有効である。しかし、質問紙法による心理アセスメントは、生徒への十分な説明や保護者の理解を得るとともに、生徒の置かれている状況を考え、計画性を深め実施していく必要がある。
4. 短学活という限られた時間であったために、グループ体験活動をお互いに振り返る十分な時間が取れなかったが、生徒の感想やアンケート結果を還元することで活動の動機付けにつながる。また、他の友達の感想に触れることにより、他者理解が一層促され実践の効果が期待できるため、今後は全体へのフィードバックによる価値の深まりを視野に入れた活動を仕組む必要がある。
5. 質問紙法やフィールドワークでのアセスメントには出てこない課題もある。普段から生徒の出すシグナルをキャッチできるアンテナをはりめぐらしておくとともに、生徒の気づきを受け入れる資質を高めておくこと、また、日常から家庭や地域との情報交換を密に行い生徒の多様な情報を得ることが大切である。さらに、不安や悩みを相談できる生徒との信頼関係をつくっておくことが重要となる。
6. アセスメントの結果、保護者や兄弟など家庭環境に関わるような問題、倫理的な問題など、判明した時点でプライバシーに十分配慮し厳正に対処することとともに、個人情報保護については慎重に行うことが大切である。

第3節 学校教育現場でのアセスメントの活用について

本研究で活用したアセスメントによる教育活動を、実際の学校現場でどのように生かしていくかという視点から次の3点を考えた。

1. 学級経営に関しては、アセスメントを学級経営の評価分析の手段として活用できると考える。継続的にアセスメントを行うことによって学級運営の指導指針の策定や実態を捉えた的確な指導につながる。
2. 学習指導に関しては、目的に応じたアセスメントを実施することで、各教科、道徳、特別活動等における診断的評価の資料を得ることや、また、アセスメント結果をもとにした形成的な評価の観点から指導と評価の一体化を図ることができる。
3. 生徒指導に関しては、日常観察、教育相談等で得た情報と質問紙調査や行動観察によるデータとを総合的に捉えることで、多面的な生徒理解につながり、協働による生徒指導が可能になる。

おわりに

学級の実態が見えないあまりに、一人ひとりの生徒の適性が理解されず、適切な対応が行われないことからいじめの対象となったり、不登校になったりする場合がある。学級や個々の生徒のニーズに対応する学級運営を推進するには、教師の経験知と学問に媒介された知による学級集団アセスメントが同時に必要であると考えられる。また、現代の深刻化するいじめや不登校等を未然に防止するためにも生徒の実態を把握することは重要である。

現在、特別支援教育についてのニーズも高まり、特別支援を対象とする生徒については、障害に関する診断の確定にこだわらず、生徒の適性を見極め、プラスの支援を行うことが必要である。生徒の実態をより正確に捉えることで、それに対応した指導・支援を行うことが可能となる。また、こうした考え方が学校全体に浸透することにより、教師間の協働による指導・支援の充実につながり、生徒の確かな学力の向上や豊かな心の育成にも資するものといえる。

学級集団アセスメントが普及・定着することは、現在の学校教育が抱えている様々な課題の解決や改革に大いに役立つものと考えられ、積極的な意義を有するものである。

謝 辞

今回、教育実践実習を行うにあたり、実習校におかれましては御多用中にもかかわらず教育実習を引きうけてくださり、心より御礼申し上げます。

本研究を行う中で、調査対象学級の担任が逝去するという予期せぬできごとがありました。お世話になりました担任の先生に対し、この場をお借りして御冥福をお祈りし、哀悼の意を述べたいと思います。